

皮膚科のトリビア

212

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」,そこから転じて「瑣末なこと」となり,今では雑学的知識,豆知識,などを意味する言葉として定着している。

本欄は,小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ,連載しています。ご意見等ございましたら,ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第51回日本皮膚免疫アレルギー学会から

令和3年11月26日

夏用肌着による接触皮膚炎

30歳代の男性。大手衣料品メーカーの夏用機能性肌着を着用。半日後から体幹・両上腕に紅斑が出現した。成分分析から得られた試薬によるパッチテストで,2,2'-Dithiodipyridineが陽性で,アレルギー性接触皮膚炎と診断。2,2'-Dithiodipyridineは酸化剤であるが,衣料品に使用する用途や効果は不明。今後,新製品に使用される可能性があり,注意が必要なアレルゲンである。

一言コメント

「日用品による接触皮膚炎の原因検索はNITE(製品評価技術基盤機構)の力添えがないとできない。新しいアレルゲンの報告は大きな社会貢献になると認識しているのだが,開業医はなかなか時間がない。大学や病院に紹介して,緻密な計画のもとに検査を進めるのがよさそうだ。」

●第51回日本皮膚免疫アレルギー学会から

令和3年11月27日

ミルワームによるアナフィラキシー

8年前からニホンモモンガを飼育していた40歳代男性。右手を咬まれた後にアナフィラキシーショックとなり救急搬送。原因検索のため,ニホンモモンガの唾液,上皮で抗IgE血清を用いたwestern blot

を行ったが陰性。ニホンモモンガに餌として与えているミルワームの特異的IgEが陽性。western blotで110 kDaから11 kDaに10カ所のバンドを認めた。ミルワームの経皮感作が生じていたと考えた。

一言コメント

「ミルワームは小動物や熱帯魚の生餌で,ゴミムシダマシ科の甲虫の幼虫。ペットショップで見たことがある。経過からはモモンガの唾液が原因と考えるのが普通だが,よくそこまで調べたものだと感心した。ただ,ミルワームの抗原のうち,どれが原因なのかはさらに分析が必要になるだろう。」

●第51回日本皮膚免疫アレルギー学会から

令和3年11月27日

銅による接触蕁麻疹

20歳代男性。技能実習のためマスクと軍手を着用し,銅板削りを行った。作業開始10分後に手関節から前腕に膨疹が出現,咽頭の違和感と軽度の呼吸困難を伴った。原因検索として1%硫酸銅水溶液のプリックテストを施行。3 mmの膨疹を生じ陽性と判断。パッチテストでは陰性。銅による,軽度の全身症状を伴う接触蕁麻疹(接触蕁麻疹症候群)と診断した。

一言コメント

「銅に触れる機会が多いと思うが,この症例に対してはどのような生活指導が必要なのか興味がある。マスクは着用していたとはいえ,銅板を削った際の

吸入による全身症状の可能性はなかったのか、興味深い症例だった。」

●第51回日本皮膚免疫アレルギー学会から 令和3年11月27日

鍼灸の刺激で生じた単発性の 肥満細胞腫

30歳代男性。1年半前から左頬にわずかに隆起し、浸潤を触れる1 cm径の紅斑が単発。病理組織学的に真皮膠原線維間に肥満細胞の浸潤があり、肥満細胞腫と診断。同部位に美容鍼テープを繰り返し貼付していることが判明。物理的な刺激が原因で生じたと考えた。

一言コメント

「美容鍼テープの皮膚に当たる部分は金属だが、湿疹が生じた既往はないとのこと。疥癬のあとに残存した痒疹結節に肥満細胞が多数浸潤していたという経験があるが、遅延型アレルギーの機序も考えられるのではないかと思います。」

●第51回日本皮膚免疫アレルギー学会から 令和3年11月27日

吸入ステロイドにより誘発された 顔面播種状粟粒性狼瘡

気管支喘息のために1年前から補助具を用いて吸入ステロイド薬治療を行っている6歳女児。口囲に紅斑、毛孔一致性の黄白色充実性小丘疹が生じ、顔面播種状粟粒性狼瘡と診断した。クラリスロマイシンとトラニラストで治療中。

一言コメント

「吸入ステロイド薬の接触によるステロイド酒皰だと思ふ。補助具を口囲に当ててステロイド吸入を行ってれば、接触する部分にはステロイドを外用したのと同じ副反応が生じる可能性がある。思いあたる症例もあり、小児の口囲皮膚炎ではステロイド吸入を行っているか聞く必要がありそうだ。」

●第51回日本皮膚免疫アレルギー学会から 令和3年11月27日

刺激誘発性蕁麻疹の治療効果判定

40歳代の女性。1カ月前から、入浴時にお湯に触れた部分に膨疹が出現するようになった。お湯の温度は以前から41℃に調整していた。温熱蕁麻疹と診断して、TempTest[®]を用いた温熱刺激試験を行い、40℃以上で膨疹の出現を確認した。TempTest[®]は装置上面にU字型の金属部分があり、4℃から44℃までの熱勾配を発生させる装置で、5分間密着させることで膨疹を誘発し、10分後に判定を行う。患者指導や治療効果判定に有用である。

一言コメント

「機械性蕁麻疹の治療効果判定には、FricTest[®]というのがある。プレートに4つの長さの違う出っ張りがあり、4種類の圧勾配が得られる。前腕や背部を被検部位として約6 cmをこすり、10分後に3 mm幅以上の膨疹が何本生じるかで判定するというもの。面白そうだ。」

●第51回日本皮膚免疫アレルギー学会から 令和3年11月28日

加圧ストッキングの絵文字による 接触皮膚炎

周術期の深部静脈血栓症予防で使用される加圧ストッキングには、装着の方向や方法を示す絵や文字が施されていることが多い。そのインクの成分である水酸化ロジンエステルを原因とする接触皮膚炎を生じる例がある。水酸化ロジンエステルは印刷用インクのほかにも湿布やテープ、接着剤などの身近な物に含まれているので、感作されている人もまれでなく、注意が必要である。

一言コメント

「某メーカーはこれを受けてストッキング使用時にはその下にスリーブを巻くことを推奨するとともに、文字やイラストを外面に移動させる措置をとったという。ロジンの接触皮膚炎にはパッチテストでロジンとロジン誘導体で結果が乖離することもあり、注意が必要とのこと。」